

1 西伯耆における弥生集落の動向

— 晩田山丘陵周辺を中心に —

1. はじめに

妻木晩田遺跡は鳥取県西伯郡大山町・淀江町にまたがる晩田山丘陵（標高90～120m）に展開する弥生時代中期～後期の遺跡である。中期後葉以降、段階的な集落規模の拡大を経て、晩田山丘陵下に広がる淀江平野、阿弥陀川左岸扇状地を含む地域の拠点的な集落へと成長する。そして、後期後半には、全国最大規模、約170haの空間を占有する集落へと発展するのである。

ここでは、晩田山丘陵周辺の弥生時代遺跡の消長および妻木晩田遺跡の成立に至る過程の整理を試みる。さらに米子平野、阿弥陀川右岸扇状地にみる弥生時代遺跡の動向を通じ、西伯耆地域の弥生集落¹の変遷と西期について概観してみたい。

2. 時期区分

本稿では弥生時代を6期に大別する。時間軸となる土器編年については、清水真一氏による様式編年案を参考に、近年の動向を踏まえながら、表1のような整理を試みた²。時期区分は、Ⅰ期＝弥生時代前期、Ⅱ期＝中期前葉、Ⅲ期＝中期中葉、Ⅳ期＝中期後葉、Ⅴ期＝後期、Ⅵ期＝終末期に対応する。

Ⅰ～Ⅵ期の土器の様相を概略すると次のようになる。

Ⅰ期 いわゆる遠賀川式(系)土器に代表される土器群、4小期に細分する。

Ⅱ期 クシ描文の出現

Ⅲ期 クシ描文と突帯文の盛行、凹線文の出現、3小期に細分する。

Ⅳ期 凹線文の盛行と突帯の衰退、3小期に細分する。

Ⅴ期 凹線文の衰退、複合口縁の成立といわゆる擬凹線の出現と盛行、3小期に細分する。

Ⅵ期 擬凹線文など装飾性の衰退、底部の小型化から丸底化が進む、3小期に細別する。

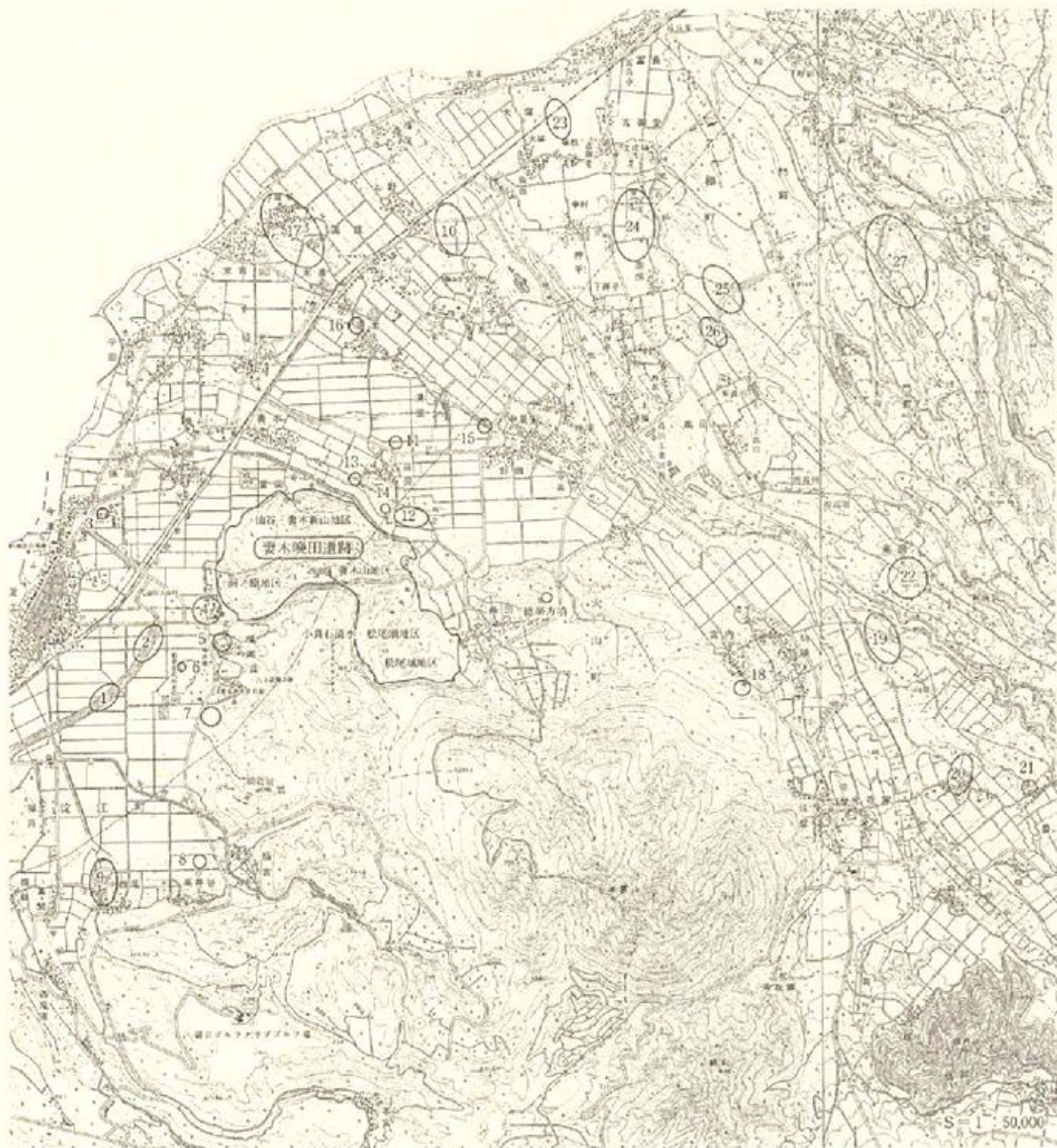
3. 晩田山丘陵周辺の地形

妻木晩田遺跡の所在する晩田山丘陵は孝霊山(751.4m)から派生する丘陵性の山地である。丘陵の北側には大山町と名和町の町境を流れる阿弥陀川によって扇状地が形成されている。一方、南西側には淀江平野が広がり、海岸部には砂州が発達している。この砂州の発達により縄文時代に流入していた入り江がしだいに封鎖され、弥生時代になると淡水の潟湖が形成された。古淀江潟部分にはデルタ地形が発達しており、平野東部の福岡地区、稲吉地区から派生する小規模な扇状地との境付近には低湿地が広がる(図Ⅲ-1-2 地形分類)。

4. 晩田山丘陵周辺の弥生時代遺跡

遺跡の分布は、概ね、地形に対応する形で、晩田山丘陵、阿弥陀川左岸扇状地、淀江平野に大別できる。なお、

時期	指標となる資料	清水1992	濱田2000	松井1997	辻2000	妻木晩田編年 松本ほか2000
Ⅰ	0 (古海遺跡)		古海式			
	1 長砂第4遺跡・長瀬高浜遺跡S1169		越敷山式/前期1式			
	2 長瀬高浜遺跡S171・156	I-1	前期2式			
	3 長砂第3遺跡	I-2	前期3式			
	4 清水谷遺跡環境・今津岸の上環境	I-3	前期4式			
Ⅱ	(長砂第1遺跡・古市流田遺跡SD9・SX2)	Ⅱ-1・2				
Ⅲ	1 (宮尾遺跡環境上層)	Ⅲ-1				
	2 下山南遺跡SK03・66ほか・茶畑山遺跡SK29	Ⅲ-2		西伯耆Ⅰ	Ⅲ-1	
	3 茶畑山遺跡SK78・82・101ほか	Ⅲ-3		西伯耆Ⅱ	Ⅲ-2	1期
Ⅳ	1 青木遺跡FSK12・HIS22・茶畑山遺跡SK07・09ほか	Ⅳ-1		西伯耆Ⅲ	Ⅳ-1	2期
	2 長山馬籠遺跡SI01・茶畑山遺跡SK54・57ほか	Ⅳ-2		西伯耆Ⅳ	Ⅳ-2	3期
	3 鶴田合清水遺跡SI02ほか	Ⅳ-3		西伯耆Ⅴ	Ⅳ-3	4・5期
Ⅴ	1 代遺跡SI23・福成石佛前SI02・SS01ほか	Ⅴ-1		西伯耆Ⅵ		6・7期
	2 代SI09・SI17・SI24ほか	Ⅴ-2		西伯耆Ⅶ		8期
	3 越敷山萩名第3遺跡SI04ほか	Ⅴ-3		西伯耆Ⅷ・Ⅸ		9期
Ⅵ	1 越敷山18a区SI04・青木FSI03ほか	Ⅵ-1		西伯耆Ⅹ		10期
	2 青木遺跡HIS54ほか	Ⅵ-2		西伯耆Ⅺ		11期
	3 越敷山17区SI16ほか					



淀江平野の遺跡			阿弥陀川左岸の遺跡		阿弥陀川右岸の遺跡	
1	古淀江湯	井手勝遺跡	10	上野遺跡群	19	向原遺跡群
2	隣接遺跡群	福岡遺跡	11	莊田遺跡群	20	蔵岡遺跡群
3	今津岸の上遺跡		12		21	原遺跡
4	晩田遺跡		13		22	高田第10遺跡
5	下楚利遺跡・宮廻遺跡		14		23	大塚塚根遺跡
6	福岡谷ノ上遺跡		15	清原遺跡	24	茶畑山道遺跡
7	福岡山石馬遺跡		16	唐王遺跡	25	茶畑第2遺跡
8	角田遺跡		17	国信遺跡	26	東高田遺跡
9	井手狭遺跡		18	宮内遺跡群	27	門前第3遺跡

図Ⅲ-1-1 晩田山丘陵周辺の弥生時代遺跡

本稿では、妻木晩田遺跡の出現～盛行期（Ⅰ～Ⅴ期）までを扱うことにする。

（1）淀江平野の遺跡

古淀江潟隣接遺跡群（井出勝・福岡遺跡）³ この2遺跡は遺跡名を異にするが、古淀江潟に隣接していたと推測される一連の遺跡である。この両遺跡ではⅠ～3期・4期、Ⅲ～2～Ⅵ期の土器が出土している。遺構としては流路のほかに、福岡遺跡でⅠ～3・4期、Ⅳ期の土坑群が検出されており、土器に用いる粘土の採掘坑と推測されている。また、木製農耕具などが出土している。各期を通じ生産活動域であったと考えられる。

今津岸の上遺跡⁴ 阿弥陀川扇状地の南西端、晩田山丘陵裾を流れる妻木川左岸に位置する遺跡で、微高地上に楕円形に巡る環壕が掘削されている。環壕内からはⅠ～4期の土器が出土している。掘削時期の上限を押さえたいが、Ⅰ～4期を遡る土器がみられないことから、土器Ⅰ型式程度の存続時間が見込まれる。環壕の規模は長軸約130m、短軸約80mと推定され、環壕内に同時期の遺構は確認されていないが、環壕壁面を掘り込むピット列や、環壕から外に10mほど離れた場所で竪穴状の遺構が検出されている。竪穴状の遺構の規模は直径2.5m、環壕に伴う簡易な施設と調査者は判断している。

晩田遺跡⁵ 晩田丘陵裾の段丘と福岡扇状地と阿弥陀川扇状地の合流部に位置する部分で小規模な調査が行われている。遺構は確認されていないが、Ⅲ～2～Ⅳ～3期の土器が多く出土している。

下楚利・宮廻遺跡⁶ 孝霊山から派生する丘陵先端部に位置する遺跡である。小規模な調査が行われている。中期の土坑と土器が出土していることが報告されているが、詳細は不明である。土坑は直径1mほどの円形を呈すもので、数基の土坑がまとまって検出されており、貯蔵穴と推測される。隣接する宮廻遺跡でⅢ～2期以降の土器が出土しており、下楚利遺跡の土坑もこの時期のものである可能性が高いと思われる。

福岡谷ノ上遺跡⁷ 向山丘陵と壺瓶山丘陵の間に位置する遺跡で、Ⅳ～2期以降の土器が包含層から少量出土している。

福岡山石馬遺跡⁸ 孝霊山から派生する丘陵裾の段丘上に立地する遺跡である。福岡地区の山石馬地区で発掘調査が行われており、弥生時代中期末～後期初頭の土坑群

が報告されている。方形に巡る溝に区画されており、土坑墓群と推定されている。Ⅳ～3期～Ⅴ～1期の土器が伴う。福岡山石馬遺跡と仮称しておく。

角田遺跡⁹ 淀江平野の南東側に形成されてる小扇状地に立地する遺跡である。大型壺の頸部に舟を漕ぐ人、高層の建築物などが描かれたⅣ期の絵画土器はあまりにも有名であるが、遺跡の性格などは明らかになっていない。

井手挾遺跡¹⁰ 淀江平野の南側に位置する丘陵先端部に立地する遺跡である。Ⅴ～1期の竪穴住居跡が検出されている。

小結 縄文時代晩期前葉には、古淀江潟の南側に立地する河原田遺跡（晩期前葉）と、北東側に位置する井出勝・福岡遺跡（晩期前葉～後葉）が併存している。両遺跡とも、居住域については明らかになっておらず、併存する2集落という見方ができるか否かわからない。

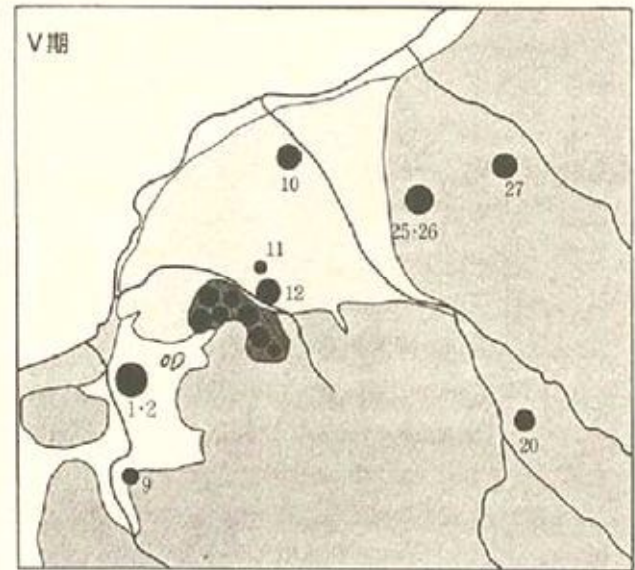
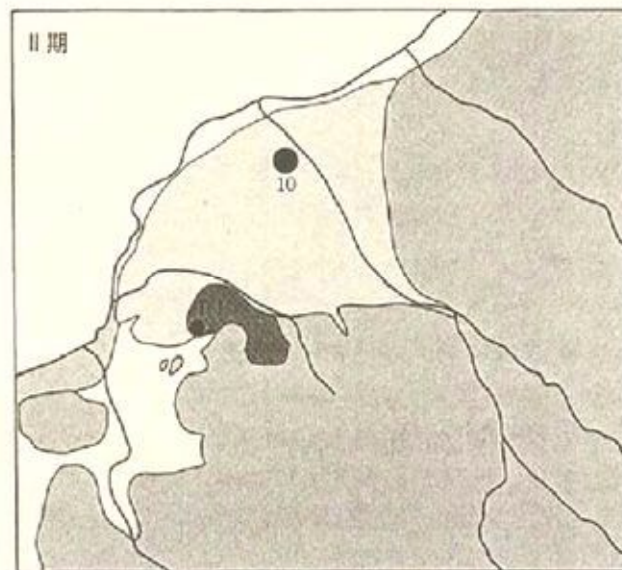
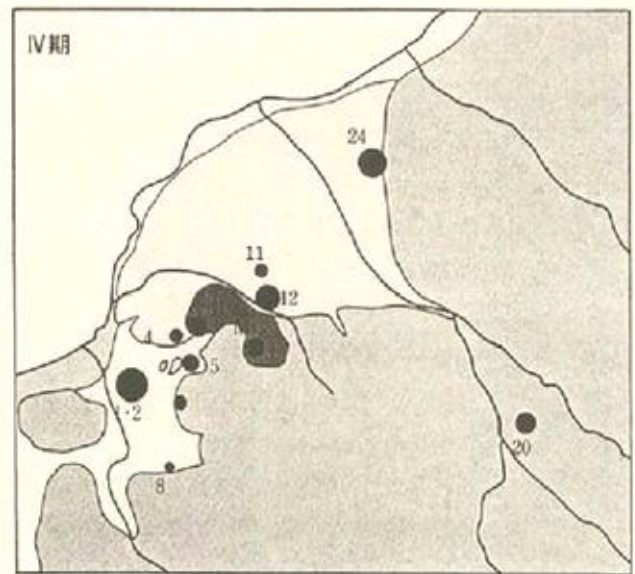
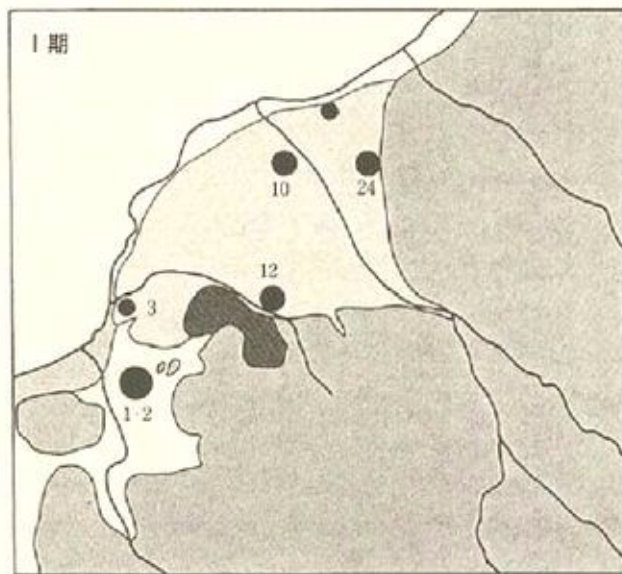
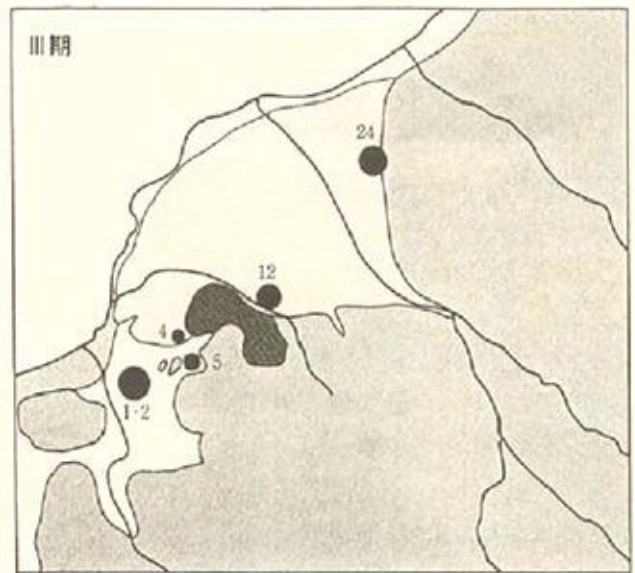
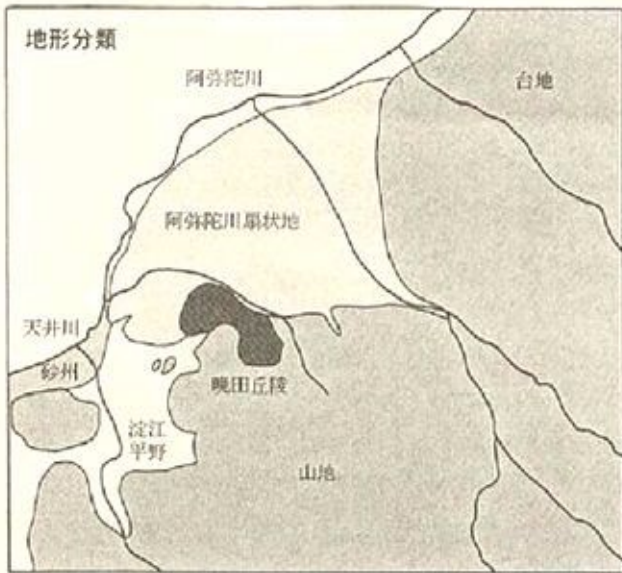
既存の資料から判断する限り、河原田遺跡は晩期後葉に継続せず、晩期中葉以降は井手勝・福岡遺跡周辺に生活の主体が移行しているようである。生業に占める水稲耕作の割合の増加に伴い、古淀江潟の西側に広がる扇状地に可耕地を求めた結果と推測する。

現在のところ、集落像の窺えるⅠ期の遺跡は明らかでないが、Ⅰ～3・4期の粘土採掘坑とみられる土坑群が福岡遺跡で検出されており、その周辺に集落の存在が予想できる。Ⅰ～4期には、今津岸の上遺跡で環壕が築かれる。しかし、Ⅰ期からⅡ期へ継続する遺跡は未確認で、Ⅱ期～Ⅲ～1期の間、空白が生じている。

Ⅲ～2期になると丘陵裾の段丘上に晩田遺跡、下楚利・宮廻遺跡が確認できる。居住域など明らかになってはいないが、丘陵裾の段丘上に集落が展開していたものと考えられ、いずれもⅣ期へと継続する。また、福岡山石馬遺跡にみられる方形に区画された土坑墓群は、段丘上に営まれた遺跡との関係が窺われる。しかし、福岡地区にみられたⅣ期の遺跡は、Ⅴ期には継続しないようである。

なお、古淀江潟の縁辺部に立地する井手勝・福岡遺跡は、弥生時代を通じて、周辺の集落遺跡と密接に関連した生産活動領域であったとみられる。

単発的な有り様を示す角田遺跡、井手挾遺跡は、福岡地区周辺に展開する遺跡群とは異なる一群として捉えて



※番号は図Ⅲ-1-1に対応。DHは妻木晩田遺跡洞ノ原地区、MGは松尾頭地区を表す。
※ドットの大きさは、集落規模を表さない。

図Ⅲ-1-2 晩田山丘陵周辺遺跡時期別分布

おくのが妥当であろう。

(2) 阿弥陀川左岸扇状地の遺跡

上野遺跡¹¹ 阿弥陀川左岸に立地する遺跡で、I-3～4期、II期、V-3期の土器が出土している。詳細は不明であるが、トレンチ調査で竪穴住居跡状の落ち込みが確認されており、前期の集落跡と推察される。

また、上野遺跡は、阿弥陀川左岸扇状地で唯一、II期の土器が出土する遺跡であり、I期から継続して集落が営まれていたと考えられる。

荘田遺跡群(新田原・塚田遺跡)¹² 晩田山丘陵の北東側に位置する遺跡である。塚田遺跡でI-3期の土器が少量出土しているが、II期へは継続しない。III-3期以降、荘田地区に活動の痕跡が認められるようになり、塚田遺跡でIII-3期の土坑、IV-2ないしIV-3期の竪穴住居跡、V-2期の竪穴住居跡や土坑などが確認されている。また、新田原遺跡では方形に巡る溝が検出されている。

小結 阿弥陀川左岸扇状地における縄文時代晩期の生活痕跡は希薄で、縄文時代晩期から弥生時代へと連続的に変遷する遺跡は現在のところ確認されていない。

上野遺跡はI-3～II期を主体とする集落で、初現はI-2期まで遡る。塚田遺跡でもI-3期の土器が確認されているが、II期への継続性は認められない。唯一、II期へと継続する上野遺跡は、阿弥陀川左岸地域における中核的な初期農耕集落に位置づけられるだろう。

現状では、III-1期は、阿弥陀川左岸扇状地の空白期である。再び営みが確認できるのはIII期の終わり頃で、荘田遺跡群に集落の形成が予想される。

荘田遺跡は、III期末からIV期、そしてV期へと継続する。また、V-3期には上野遺跡に再び生活の痕跡が認められるようになる。

以上、阿弥陀川左岸扇状地では、I～II期にかけては、阿弥陀川に隣接する上野遺跡、III期以降は晩田山丘陵裾に展開する荘田遺跡群を中心に遺跡が展開する。

(3) 晩田山丘陵の遺跡—妻木晩田遺跡—

晩田山丘陵上には多くの遺跡が分布しており、かつては個々に遺跡名が付けられていた。現在、それらを包括して妻木晩田遺跡と呼び、谷で画される丘陵を一単位と

する7地区(洞ノ原地区・妻木山地区・妻木新山地区・仙谷地区・松尾頭地区・小真石清水地区・松尾城地区)を設定している。

この丘陵上における弥生時代の営みはII期に遡り洞ノ原地区西側丘陵部でII期の土器が少量出土している。しかし、該期の遺構などは確認されていない。

その後、空白期間を経てIV-1期になると、洞ノ原地区、妻木山地区、松尾頭地区で遺構が確認されている。洞ノ原地区の西側丘陵には、円形に巡る環壕が掘削されると考えられている¹³。ただし、平成12年度に実施した第4次調査では、環壕の掘削時期を明確に捉えることはできなかった。環壕の掘削時期については今後の大きな課題であるが、ここでは、これまでの調査成果に準じ、少なくともIV期には環壕が形成されていたとしておこう。また、妻木山地区、松尾頭地区では貯蔵穴とみられる土坑(以下、貯蔵穴とする)が検出されている。

IV-2・3期には、松尾頭地区に竪穴住居が認められる。現在のところ、この他の地区で、竪穴住居跡は確認されていない。また、IV-3期、松尾頭地区で貯蔵穴が激増する。

V-1期になると、松尾頭地区に加え、妻木山地区、妻木新山地区でも竪穴住居跡が確認されるようになる。V-2期には、松尾城地区にも竪穴住居が出現し、各地区で竪穴住居の増加が顕著になり、V-3期に集落規模はピークを迎える。なお、洞ノ原地区西側丘陵の環壕は、V-2期には機能を停止しており、V-3期以降、集落規模の拡大に伴い居住域へと変遷する。

5. 晩田丘陵をめぐる遺跡の動態

淀江平野、阿弥陀川左岸扇状地、晩田山丘陵の遺跡をおしなべてみると、弥生時代を通じて不動の集落遺跡は認められない。ここで妻木晩田遺跡の出現から盛行に至る晩田山丘陵周辺における遺跡群の動態について整理を行う。

I期 阿弥陀川左岸扇状地では、I-3期以降、上野遺跡が出現、荘田地区にも小規模な集落の存在が予測される。淀江平野では、福岡地区に集落の存在が窺われ、I-4期になると、今津岸の上遺跡に環壕が掘削される。現状では、晩田山丘陵上にI期の土器が確認できないことから¹⁴、丘陵下の平野部に集落が展開していたものと

考えられる。

Ⅱ期～Ⅲ-1期 淀江平野はこの時期、遺跡の空白期を向かえる。しかし、この空白を埋める土器が、妻木晩田遺跡洞ノ原地区西側丘陵で出土しており、淀江平野から洞ノ原地区西側丘陵へ、低地から高地へといった動向が窺われる。一方、阿弥陀川左岸扇状地では、上野遺跡がⅡ期へと継続するが、淀江平野同様、Ⅱ期以降、遺跡の分布は希薄になり、Ⅲ-1期には空白が生じている。

Ⅲ-2・3期 再び丘陵下で集落形成が始まる時期である。集落の具体像は明らかではないが、淀江平野の福岡地区、阿弥陀川左岸扇状地の荘田地区に集落の存在が窺われる。

Ⅳ期 この時期、丘陵下には、淀江平野の福岡地区、阿弥陀川左岸扇状地の荘田地区に集落の存在が推測される。一方、これらと同時期の遺跡が丘陵上にもみられるようになる。晩田山丘陵では、洞ノ原地区西側丘陵に環境が掘削され、松尾頭・妻木山地区に住居跡や小規模な貯蔵穴群が形成される。しかし、未だ、明確な居住域を形成してはいないようである¹⁴。

Ⅴ期 晩田山丘陵上では、洞ノ原地区西側丘陵の環境がⅤ-2期には機能を停止している。一方、Ⅴ-2期以降、妻木晩田遺跡の集落規模は急速に拡大を始め、Ⅴ-3期にピークを迎え、これに呼応するかのように、淀江平野縁辺部の段丘上にみられた営みは希薄になる。

一方、阿弥陀川左岸扇状地では、荘田地区に継続した営みが認められる。上野遺跡でも、この時期、再び集落の形成が始まる。Ⅴ期の遺跡が散在する点で、淀江平野とは異なった様相を示している。

こうした淀江平野と阿弥陀川左岸扇状地にみられる相異なる状況は、異なる2つの動きではなく、妻木晩田遺跡を核として、水田等の生産域としての淀江平野、分村(子村)の展開する阿弥陀川左岸扇状地という地域的社会の在り方として理解できるのではなかろうか。

以上、Ⅰ期～Ⅴ期までにみられる地域内の動向を整理すると、不明瞭ながらⅠ-4～Ⅱ期、Ⅳ～Ⅴ-1期に画期が認められる。前期後葉～中期前葉にみられる第1の画期では、Ⅰ-4期に環境が出現、その直後Ⅱ期には遺跡数が減少、一部では、それまで営みが希薄な丘陵部に遺跡が認められるようになる。一方、中期後葉～後期前葉にみられる第2の画期では、Ⅳ期に環境が出現、Ⅴ期

以降、淀江平野での営みが希薄になるのに比例するように、晩田山丘陵上に展開する妻木晩田遺跡が拡大発展していく。

6. 西伯耆地域の遺跡の動態

Ⅰ-4期は西伯耆の各地域に環境が築かれる時期である。また、縄文系譜にある突帯文系土器が完全に土器組成から欠落するのもこの時期である。当該期にみられるこうした事象は、この地における縄文から弥生への移行を端的に示している。

続くⅡ期には遺跡数が大幅に減少する。しかし、米子市目久美遺跡¹⁵、長砂遺跡¹⁷、古市流田遺跡¹⁶のように比較的早い段階に遠賀川系(式)土器を保有している遺跡の多くは、Ⅰ期からⅡ期へと継続している。つまり、Ⅱ期にみられる遺跡数の減少傾向は、Ⅰ期以来の中核的な遺跡を中心とした集落の再編とみることができよう。

こうした集落の再編を経て、Ⅲ期には地域の拠点と目される集落が成立する。なお、Ⅲ期の拠点的な集落遺跡は2つのタイプに大別できる。ひとつは、Ⅱ期から継続して営まれる集落、もう一方は、Ⅲ期に出現する集落である。

この前者の代表例が米子平野の目久美遺跡である。集落の実態については不明な部分が多いが、米子平野では、Ⅲ期の土器が多量に出土する数少ない遺跡である。Ⅱ期に目久美遺跡と併存していた長砂遺跡、古市流田遺跡はⅢ期へ継続しないことから、米子平野では、目久美遺跡を核に集落再編が進んだものと考えておきたい。

一方、後者の好例が、阿弥陀川右岸扇状地に所在する茶畑山道遺跡¹⁸である。茶畑山道遺跡はⅢ-2期からⅣ-3期にかけて営まれた遺跡で、集落の中核部と推定される場所が調査されている。その結果、Ⅲ-2・3期には独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物と、東西南北に主軸をもつ建物群が立ち並ぶ様子が明らかにされた。独立棟持柱建物の存在、方形を意図した建物配置にみられる中核部の構造は、他の地域において拠点的な集落と考えられる遺跡に多くみられる。茶畑山道遺跡もまた阿弥陀川右岸地域の中核的な存在であった可能性が高い。

しかし、こうした中期の拠点的な遺跡は、いずれもⅤ期へと続かない。目久美遺跡は、中期以降に度重なる自

然災害に見舞われており、V期以降の営みは希薄になる。茶畑山道遺跡では、方形区画がIV期に途絶える。続くV期の遺跡は茶畑山道遺跡の南側に分布しており、IV期からV期にかけて集落の移動があったものと推測される。要因は一律ではなかろうが、中期の拠点的な集落はIV期末をもって解体ないし再編されている。

一方、日野川右岸では、IV-3~V-1にかけて、尾高浅山遺跡²⁰、日下寺山遺跡²¹といった丘陵上の遺跡に、環境が掘削される。こうしたV期初頭にみられる新しい集落の動きは、中期弥生社会の解体に前後する大山山麓の動向として理解できるだろう。

そして、V期後半には、青木遺跡や越敷山遺跡群など丘陵に立地する遺跡が、IV期以降、段階的な発展を遂げ、後期後半には地域の拠点と目される大規模集落を形成するのである。

以上、西伯耆の動向を概観した。ここでもI-4~II期、IV-3~V-1期に、大きな変化を指摘できる。前者では、環境の出現とそれに続く集落の再編、後者では、中期の拠点集落の解体→後期の拠点集落の成立、そして、ここでも環境が出現し、丘陵上へ遺跡の移動が認められる。

7. 西伯耆にみる2つの画期について

晩田山丘陵周辺の遺跡の動向から推察した2つの画期は、西伯耆においても確認できる。

第1の画期は、I-4期にみられる環境の出現、そしてII期以降の集落再編の動きである。西伯耆では、I-3・4期にかけて、縄文的要素が急速に払拭される。こうした時期に出現する環境は、この地域における本格的な農耕社会の定着を示す新しい遺構である。続くII期に集落の再編を促したのは、I期後葉に想定される地域社会の変化がその一因と考えられる。

第2の画期は、中期の拠点集落の解体と、IV期~V-1期に丘陵上にみられる環境の掘削である。また、中期の拠点集落の解体に呼応するかのよう、IV期からV期にかけて、丘陵上に遺跡が増加する。この中には、V期以降、段階的に拡大発展する妻木晩田遺跡、青木遺跡、越敷山遺跡群といった大規模な集落遺跡もある。こうした動向は、中期弥生社会の解体に伴う集落の再編、ないしは中期弥生社会から新たな地域的なまとまりを形

成する後期弥生社会への転換を示す一様相として捉えられる。

また、第2の画期にみられる平野から丘陵上への動きは、その背景にしばしば想定される社会的な緊張関係の是非とともに、今後、一考を要する問題と思われる。これまで、当該地域では積極的な議論が行われていないが、妻木晩田遺跡や越敷山遺跡群など丘陵上に立地する大規模な集落遺跡も含め、いわゆる高地性集落の概念で括ることのできる遺跡の実態について整理する必要がある。なお、晩田山丘陵周辺地域では不明瞭ながら、第1の画期に相当するII期にも、平野から丘陵上への動きが推測される。西伯耆でみると、会見盆地の低丘陵上に環境が築かれる遺跡が集中的に認められる。第1の画期に伴う、遺跡の上下動も、併せて検討課題としてあげておきたい。

8. おわりに

平成7年にリゾート開発に伴う第1次調査が始まって以来、妻木晩田遺跡は、大山山麓に甦る弥生時代の大規模集落として注目を集めてきた。広大な居住域、首長級の墓域をセットで捉えられることのできるこの遺跡は、山陰地方の弥生社会を考えるうえでこの上ない遺跡である。しかし、今、過去を振り返るなら、大きな遺跡の中に、特殊性を求めることで、妻木晩田遺跡の集落像が語られていたような気がしてならない。

しかし、晩田山丘陵周辺にみる遺跡の動向は、西伯耆において通有の動向であることが確認できた。このことは、弥生時代後期後半には全国最大規模の集落と評される妻木晩田遺跡が、西伯耆において、決して特殊に発展した集落ではないことを端的に示している。つまり、何かを特化することで、妻木晩田遺跡が内包する情報を整理することは難しい。特に、大規模集落へと拡大発展していく背景については、広く山陰地方、そして中国山地、山陽地方も含む広域において検討していく必要がある。

(濱田 竜彦)

註

- 1 竪穴住居跡、掘立柱建物跡の建築物や、貯蔵穴などの生活関連遺構の有無を、集落の一つの基準とする。
- 2 清水真一1992「伯耆・因幡」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編』木耳社
 松井 潔1997「東の土器、南の土器—山陰東部における弥生時代後期中葉—古墳時代初頭の非在地系土器の動態」『古代吉備』第19集
 辻 信広1999「弥生中期中～後葉の土器について」『茶畑山道遺跡発掘調査報告書』名和町埋蔵文化財発掘調査報告書第24集、名和町教育委員会
 濱田竜彦2000「山陰地方における弥生文化成立期の様相—山陰東部を中心に—」『弥生文化の成立—各地域における弥生文化成立期の具体像—』埋蔵文化財研究会
- 3 鳥取県教育文化財団1992「福岡遺跡」鳥取県教育文化財団調査報告書27
 鳥取県教育文化財団1993「今津塚田遺跡 福岡遺跡（6区）」鳥取県教育文化財団調査報告書30
 鳥取県教育文化財団1993「井手跡遺跡」鳥取県教育文化財団調査報告書31
- 4 淀江町教育委員会1991「今津岸の上遺跡発掘調査報告書」淀江町埋蔵文化財調査報告書第19集。
- 5 淀江町教育委員会1981「宇田川」
- 6 淀江町教育委員会1981「宇田川」
 淀江町教育委員会1992「北尾宮廻遺跡発掘調査報告書」淀江町埋蔵文化財調査報告書第27集
- 7 淀江町教育委員会1993「福岡谷の上遺跡発掘調査報告書」淀江町埋蔵文化財調査報告書第32集
- 8 淀江町教育委員会1975「西部広域農道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」淀江町教育委員会
- 9 淀江町教育委員会1981「宇田川」
- 10 淀江町教育委員会1987「井手扶遺跡発掘調査報告書」淀江町埋蔵文化財調査報告書第10集
- 11 倉光清六・藤田等「山陰彌生式土器の研究(1)—鳥取県西伯郡所子・上野遺跡—」『考古学雑誌』第48巻2号
 大山町教育委員会1981「原・蔵岡第一・蔵岡第二・上野第二遺跡」大山町埋蔵文化財発掘調査報告書・Ⅶ
- 12 大山町教育委員会1979「新田原遺跡」大山町埋蔵文化財発掘調査報告書・Ⅳ
 大山町教育委員会1979「塚田遺跡」大山町埋蔵文化財発掘調査報告書・Ⅴ
- 13 淀江町教育委員会2000「妻木晩田遺跡 洞ノ原地区・晩田山古墳群発掘調査報告書」淀江町埋蔵文化財調査報告書第50集
- 14 晩田山丘陵上では、Ⅰ期の弥生土器は出土していないが、第5次調査で、無刻目突帯文土器と思われる土器片が出土している。小片のため詳細はわからないが、突帯文土器であるなら、縄文時代晩期末～弥生時代前期前半（Ⅰ-1～2期）のものと思われる。
- 15 晩田山丘陵上にⅢ期の営みが希薄なこと、晩田山丘陵下にはⅢ期から継続するⅣ期の集落が存在していることから、丘陵上の環境や貯蔵穴群と丘陵下の遺跡との関係も想定しておきたい。特に、洞ノ原地区の環境は、眼下に展開する晩田遺跡との関係が窺われる。
- 16 米子市教育委員会1986「目久美遺跡」
 米子市教育委員会1988「米子市下水道祇園第一幹線工事に伴う発掘調査報告書 目久美遺跡」
 米子市教育文化事業団1992「目久美遺跡 下水道目久美町内枝線その4に伴う埋蔵文化財発掘調査」⑧米子市教育文化事業団文化財調査報告書2
 米子市教育文化事業団1995「目久美遺跡Ⅳ」⑧米子市教育文化事業団文化財調査報告書10
 米子市教育文化事業団1998「目久美遺跡Ⅴ・Ⅵ」⑧米子市教育文化事業団文化財調査報告書25
- 17 米子市教育文化事業団1998「長砂第3・4遺跡」⑧米子市教育文化事業団文化財調査報告書26
 米子市教育文化事業団1999「長砂第3遺跡」⑧米子市教育文化事業団文化財調査報告書29
- 18 鳥取県教育文化財団2000「古市遺跡群2」鳥取県教育文化財団調査報告書62
- 19 名和町教育委員会1999「茶畑山道遺跡」名和町埋蔵文化財発掘調査報告書第24集
- 20 米子市教育委員会「米子市文化財ガイドブック2 尾高浅山遺跡」
- 21 米子市教育委員会1993「米子市内遺跡発掘調査報告書」

図Ⅲ-1-3